グルっとまわす

中華人民共和国のニュースを見ていると時折「第１届全国○○会」と書かれているのにでくわす。「届」とはなにか。私たちは「届」については学校でも日常も「とどける」としか習っていない。かつて某放送協会がタイトルに使っていたような「心にとどけなんとか歌謡ショウ」や「天までとどけ」の使い方からのイメージが強くて、「第 1 届」などみるとなにやら主催者側のなんとか成功しておくれよの願望がもろだしのように思えてしまう。

が、これは誤解だ。冷静に考えよう。「届」の訓は「とどく」だが、音はなにか。これも常用漢字表には「とどける・とどく」としか定義してなく、学校教育上は音はない。

「届」の字形を見ると「由」がある。だいたい郵便物を届けるのは郵便屋さんだ。「郵」と関係ある言葉だから音は「ユウ」かも。いやそれは早計というものだ。届けるものは郵便にかぎってない。

「届」という漢字が持つ中国での本来の意味は「いきなやむ」「至る・極まる」と「量詞」である。「とどく」は国訓つまり日本国内でしか使わない意味である。つまり「届」は日本国内でのみ通用する漢字として常用漢字表に含められたのである。ところで「届」の音は字典を見れば書いてある。「カイ」である。でも日本国内では「届出」をカイシュツといわない。「届」はあくまで「とどけ」である。

だから日本人が「第１届」を理解できないのは当然である。

「第１届」を日本語で読むと「ダイイッカイ」つまり「第１回」である。（現代中国語では、届はチィエ、回はホェイ）。

では「届」の構成エレメントのどれに「カイ」音はあるのだろうか。

「届」は略した字体である。略したからわからなくなったが本来の字体は「屆」である。

この「かばねだれ」の下の「凵」が「カイ」という音をもつのである。「凵」の意味は四角い土くれで「塊（カイ）」と同じ意味である。

「凵」は日本人にはなじみ薄い字かと言うとそうでもない。わりと身近な文字の中に隠れている。

「とらがしら」を持つ文字には次のようなものがある。

① 虎 虐 虚 虞 虔 虐 虖 虐 虖

② 虜 膚 盧 慮 處

なぜここで 2 グループに分けたかというと、漢和字典で①は「とらがしら」部に収容されているものである。②はこれほどはっきり「とらがしら」を持ちながら別の部首に配列されているのである。ちなみに「虜」は「力部」、「膚」は「肉部」、「盧」は「皿部」、「慮」は「心部」、「處」は「几部」である。字典ではなぜこういう扱いをするのだろうか。

理由は②グループの文字は「虎」の意味を持っていないからである。蛇足ながら各文字の意味は次のとおりである。

「膚」＝はだ

「慮」＝おもんばかる

「盧」＝めしびつ

「虜」＝とりこ

「處」＝居る、おちつく、ところ

嘘でしょ。強い頑丈な虎のイメージを持たせたかったから「とらがしら」を使ったのではないですか。次のように。

男が虎にのしかかられているので、とりこ「虜」

虎の胃のように強い肌だから「膚」（よほど厚顔の人らしい）

盆の中の「田（穀物）」を虎が覆うように守る飯櫃だから「盧」

餌食をとる時の虎のように慎重に考えるから「慮」

「処」が本字なのに「虍」をつけたのは、虎に守られているくらい「おちつく」から「處」、ほらなんとなく説明がつくではないですか。

あなたがこう言いたいとしたら、私はあえて答える。そりゃ屁理屈だと。説文解字の中にもあった「牛が口を近づけるから『告』」というのと同じくらい。

説明の都合上「處」にはここで退席願って、残りの「虜・膚・盧・慮」4 字についてさらに話を続ける。

再びいう。「虜・膚・盧・慮」には「虎」の意味はない。

洞察力が鋭い方はお気づきだろうが、「膚・慮・盧・虜」の中に「田」が入っている。

いやこの部分は「田」ではない。「田」と見えたのは実は「凵」なのである。「凵」はここにひそかに身を隠していたのである。だから各文字の下の部分は「胃・思・田＋皿・男」ではない。「肉・心・皿・力」なのである。

「虍」は「凵」と合体し「虐」となった。「虎」とは別な意義を持つエレメントに変わった。では「虐」とはどういう意味を持っているのか。「泥によごれたうすぎたない虎」ではない。「虐」にはその下にあるエレメントの持つ意義を目的語あるいは副詞として「グルッとまわす・まわる」意味がこめられている。

では「虐」の指示どおり「肉・心・皿・力」をグルっと回してみよう。

「力」づくで相手をグルッと回す（縛る）と「虜（とりこ）」になる。
「肉」にグルッとまいているものは「皮膚」。
粘土を「皿（盤、ろくろ）」でグルッと回すとできるのは口の小さい飯櫃「盧」。
「心」をグルッとめぐらすのは「慮（おもんばかる・心をめぐらせる）」。

上の屁理屈にくらべるとなんとわかりやすい無理のない論ではないか。

ところで「届」で「凵」を「由」に、「膚・慮・盧・虜」で「凵」を「田」と字形変更した理由はなんだろうか。勘定してみるとわかるが「凵」「由」「田」とも 5 画なのである。「由」「田」は「凵」を略したものであるとは言いがたい。楷書ではこの両者を包摂しているようだから、見慣れた「由」や「田」に書いたのが真相だろう。

さて「虐→虐」で行われたこうした任意な字形改定は、漢字字形構成からみての意味解

釈を不可能にした。例えば「膚・慮・盧・虜」たちを一見「とらがしら」と「胃・思・𤴓・男」が組み合わされたもののように錯覚させてしまった。

私たちは読めない漢字に出会ったときに、字典を引く前にまずその構成字形要素からその意義を探ろうとする。なぜならば漢字は表意文字であると信じ込んでいるからである。しかし実体は違う。もう字形から意味を推測できない。漢字は完全な表意文字ではない。上の例では「肉」を「胃」、「心」を「思」と認識したところからさきは誤解の道を突き進むのである。

「日本意外史」と書くべきところ、ワープロの変換を間違えて「日本以外史」としたとしよう。常識的にはこれは誤字である。「おもいのほか」を「もってほか」とするのは明らかに間違いだ。でも表意文字でなくなりつつある漢字を使う中でこの場合を誤字とするのは片手落ちである。

「聚」の下部は「人」が横に 3 個（多くの人）並んだ形で、だから「人があつまる」意味である。「集」の旧字は「𩫖」であり頭部は「隹」が 3 個（多くの鳥）並んだ形で「鳥があつまる」である。かつて人があつまるセトルメントは「聚落」と書いた。戦後当用漢字表ができてから「聚」は表外字になったので同じ意味の熟語を鳥があつまる「集」を使って「集落」と書くことになっている。これも個人が任意に行えば誤字である。

中華人民共和国の「簡体」も実は「聚」→「集」と同じ発想で字数を減らした。毛沢東氏は表音文字が優れたものであるとし、いずれ国語をアルファベットで書かせるつもりでいたからである。漢字の簡化方案が出されてほぼ半世紀、現代中国では政府が正しい字を使えと叫んでも、民衆は任意に同じ音の異なる漢字を適宜あてはめて文を綴るようになり始めた。つまり中国において簡体は表音文字として使われ始めたのである。

今の日本も実に中途半端な状況である。社会的には漢字は書き方の上で楷書字体化（人は略字とか新字体という）し表音文字化しつつあるのに表意文字であることを強いている。

こういう状況下で漢字を記憶する場合、漢字ひとつひとつを孤立させ独立した存在としてとらえて字形を記憶しなくてはならない。

簡単に言うと例えば「意」は「立＋日＋心」を縦方向に連ねて書くだとか、「上」は「縦棒を書き、その中ほどから右に横棒を書き、最後に縦棒を下から受けるように書く」というように意味のない図形をアルファベットの綴字方法のように組み合わせ、形を作り上げることで習得するのである。

この方法で漢字を憶える事はひどく時間と努力を要するものである。小中学校で習得すべき

常用漢字表の文字数が 1945 字であるのもうなずける気がする。

古人は「膚・慮・盧・虜」のように「グルッと巻く」＋「ある概念を持つ形」という図形構成のもと 4 字が関連あるものとして作り上げた。漢字は 1 字で 1 単語である。新たな概念の文字を作るときは新たに 1 字を作ることになる。熟語のように 2 つ以上の漢字を連ねて新たな概念を作ることは漢字の本来ではない。漢字以外の文字を持たなかった中国人が多くの漢字を作り上げざるをえず、漢字の形を体系的にとらえたほうが習得のために効率的であったのである。

が、折角の古人のアイデアは、現代では、
「『膚・慮・盧・虜』」これらの文字は似ていて間違えやすいので気をつけましょう」
などと迷惑げにいわれていることだろう。

なお、「虜」の旧字とみられる「虜」の場合は「凶」が「田」となっているものがある。かの有名な「説文解字」では「グルッと回す」ではなくて「つらぬく」と取り意を解している。

「處」は本来「椅子に座る」の象形「処」に音符の「トラガシラ」をつけ形声文字としたものらしい。

この著作権は岡和男に帰属します。
©Kazuo Oka 2000